

**平成 28 年度  
組織の F D 宣言**



## 平成28年度組織のFD宣言（各部・局・学科）

### 1. 上位目的：学長

<b>本学全体の目的（使命と課題）</b>	
本学は保育学並びにビジネス実務学を教授研究し、学生の礼節・人間尊重の精神、勤労・問題解決力、リテラシー、協働力、実践力を養い、地域社会に貢献することを使命とし、また課題とする。	
<b>平成28年度の重点目標（P）</b>	
① すべての学生を成長させる教育を行う。 ② 本学教育の魅力を発信し、定員充足を図る。 ③ 地域貢献力を高める。	
<b>行動指針（D）</b>	
① 学生の主体的行動、貢献的行動を促進し、成長させる。 ② 学生のつまずきを早く察知し、一人ひとりに届く支援を行う。 ③ 授業を楽しく充実したものにする。 ④ 教職員・学生が心の通い合う温かな学園にする。 ⑤ 闊達な議論、協力によって「チーム宮学」に貢献する。 ⑥ 地域に本学の存在感をアピールし、本学への信頼感を高める。	
<b>評価基準（C）</b>	<b>評価結果</b>
① 入学満足度全学平均 85%以上で「3」 <b>84.3%</b>	1 ② 3 4
② 退学率が3%以内になれば「4」	1 2 3 ④
③ 授業外での勉強時間が増加すれば「3」 <b>増加の兆し無し</b>	1 ② 3 4
④ 「相談できる教職員がいる」が60%以上で「3」 <b>61%</b>	1 2 ③ 4
⑤ 各種行事を教職員が一丸になって取り組めて「3」 <b>見事な卒業式修了式</b>	1 2 3 ④
⑥ オープンキャンパスへの参加者が昨年より増えて「3」 <b>+174</b>	1 2 3 ④
<b>本学全体の評価結果に基づく改善方策の策定（A）</b>	
学生の学修への積極的な姿勢を作り出し、学修成果を上げられる、組織的で効果的な教育体制を整備する。	

<評価結果>

1：全く達成されなかった 2：あまり達成されなかった 3：ある程度達成された 4：かなり達成された

## 学生支援部

<b>学生支援部の目的（使命と課題）</b>	
<p>本学に入学したすべての学生が、建学の精神「礼節・勤労」を体得して全学DPを達成し、社会に貢献できる人物として自己実現していけるよう指導支援を行うことが、学生支援部の使命である。</p> <p>そのために、保護者（後援会）の協力援助のもと、各学科や各委員会等と連携し、充実した学生生活を送れる環境を醸成していくことが課題である。</p>	
<b>学生支援部の達成目標（P）</b>	
<p>① 卒業時満足度調査において、2年間の「自分の成長への満足度」90%以上を達成する。</p> <p>② 退学者ゼロを目指す。</p> <p>③ 就職率100%を達成する。</p>	
<b>学生支援部の行動目標（D）</b>	
<p>① 各種行事等で学生主体の活動機会を増やし、自分のよさや特性を生かすことで新たな自分を発見し、「自己の成長」を促すように支援する。</p> <p>② 全学DP・学科DP達成度調査等を基に、学生一人ひとりのニーズと実態に応じた支援を行う。個人の課題と成長を実感させることができるよう、ポートフォリオ活用を促進する。</p> <p>③ 気になる学生（学修・生活への不適應や経済的困窮）の早期発見及び継続的支援を行うため、「オフィスアワー」を有効に活用するとともに、保健室・カウンセラー・学科等と連携し、個人面談やカウンセラー相談等を実施する。</p> <p>④ 全学生の進路・就職決定を目指し、学科及び学級（コース）主任と連携し、就職模試等の就職支援を効果的に進めるとともに、全教員で就職先訪問を行い、求人開拓を行う。</p>	
<b>学生支援部の評価基準（C）</b>	<b>評価結果</b>
① 卒業時に「2年間の自分の成長への満足度」全学平均85%以上で、「3」。	1 2 <b>3</b> 4
② 全学DP評価項目「礼節」「勤労」が平均でレベル2.4以上であれば、「3」。	1 2 <b>3</b> 4
③ 退学者が4%未満であれば、「3」。	1 2 3 <b>4</b>
④ 就職模擬試験の受験率が85%以上であれば「3」。	1 2 <b>3</b> 4
⑤ 就職率が2月末に85%以上であれば、「3」。	1 2 3 <b>4</b>
<b>学生支援部の評価結果に基づく改善方策の策定（A）</b>	

概ね目標数値達成を実現できた。卒業時「2年間の自分の成長への満足度」は85.2%（昨年度83.4%）であり、達成できた。また退学者数は5名（1%）（H28年5月1日現在学科在籍者数500名基準）と少なく抑えられ、気になる学生の個別支援が全学的に行き届いた結果と思われる。就職模擬試験の受験率は87.3%で目標達成。就職率も2月末で95.3%と高い数値を達成した。全学DPも「礼節」2.6「勤労」2.4、と概ね目標達成。授業態度に関しては年間を通して指導体制を継続し、学友会による「クリーンBOX」作戦が開始され、後期試験では消しゴム滓の処理を行なう学生が多く見られた。一方で、敷地外での公共マナーに関する不安は拭えず、タバコの吸殻処理等の問題が残っている。「礼節」の学生生活全般に関する態度への汎化がなされるような指導が必要と思われる。さらに、授業外学修時間の少なさは依然目立ち、教育活動全般にわたる指導改善が必要である。

### 3. 教務部

### 教務部の目的（使命と課題）

教務部の使命は、短期大学設置基準等の定めに従い、次の業務を全うする事である。すなわち入学者選抜に関する事。学籍に関する事。教育課程に関する事。実習指導に関する事。履修登録と日々の授業に関する事。試験及び成績評価と単位認定に関する事。卒業に関する事。免許状・資格・称号に関する事である。

課題は、確固たる教育基盤を形成する事である。学科および関係部署と連携しつつ、入学前から卒業後までを視野に入れて、入試、教育課程、授業、実習等の改善に取り組むとともに、教職員が種々の情報を活用しながら教育にあたる協力体制作りを目指す。

### 教務部の達成目標（P）

- ①各学科・専攻科の教育の質を保証する。
- ②各学科・専攻科の教育課程編成・実施の方針に基づいて教員組織を整備する。
- ③入学者受け入れの方針に対応した入学者選抜の方法（インタビュー入試、推薦、一般等）を入試広報部と連携して検討、改善する。
- ④ 学生に関するさまざまな情報を総合的に分析、必要に応じて提供する。
- ⑤ 各学科と連携して実習指導体制を整備・強化し、実習途中での辞退者を減少させる。
- ⑥ 地域貢献に関する取り組みを充実させる。

### 教務部の行動目標（D）

- ①各学科・専攻科と連携して教育課程を体系的に編成する。
- ②各学科・専攻科の教育課程編成・実施の方針に基づいて専任教員と非常勤教員を配置する。
- ③入試広報部と連携して入学者選抜の方法（推薦、一般、インタビュー入試等）を改善する。
- ④ I R 推進室、D P 推進委員会を中心に各部署との連携を密にし、情報を収集分析する。
- ⑤教務部内における各業務の担当責任者を中心に所属教職員の連絡を密にし、連携して業務の円滑な遂行にあたる。
- ⑥地域住民を対象とした企画を充実させ、参加を促す。

教務部の評価基準（C）	評価結果
①教員養成課程、保育士養成課程の水準を維持向上させて「3」	1 2 ③ 4
②地域との連携をもとに、学生の地域での活動を活発化させて「3」	1 2 3 ④
③入学者選抜の方法の検討を行い、改善できて「3」	1 2 ③ 4
④全学D P 各学科D P 調査結果分析と改善に向けての情報提供ができて「3」	1 2 3 ④
⑤情報共有に基づき、学生教育支援体制を整備して「3」	1 2 ③ 4
⑥実習事前指導に外部講師を活用し、施設の見学を充実させ、実習に対する心構えを強化できて「3」。	1 2 ③ 4
⑦実習不適応学生の早期発見と関係学科教員の協力のもと、早期支援を行い、実習途中での辞退者が減少できて「3」	1 2 ③ 4
⑧生涯学習推進委員会による諸催事の参加者数20名以上を達成して「3」	1 ② 3 4

### 教務部の評価結果に基づく改善方策の策定（A）

今年度は教職員の努力により概ね成果を挙げることができた。次年度は、新任教員が履修および実習に関して十分な理解を基に指導できるよう支援するとともに、情報の共有と連携が求められる。実習指導においては、実習担当・学級主任の連携による観察・面談の充実を図り、一人ひとりの学生の特性・希望に応じた適切な進路選択への援助を行っていく。また、次年度は再課程認定申請があり、準備を確実に進めなければならない。関係教員の業績も重要であるが、他の教員も含め研究と授業準備にあてる時間確保ができるように、各業務内容の見直しを検討したい。

## H28 組織のFD宣言 <入試広報部>

<b>入試広報部の目的（使命と課題）</b>	
入試広報部の使命はただ一つ「学生の獲得」である。高校訪問、進学説明会、出前授業、オープンキャンパス等あらゆる機会を通して、本学の良さを積極的に高校生、保護者、高校教師にアピールすると共に、本学へのニーズの把握と不安の解消に努め、その達成に努めていきたい。なお、宮崎国際大学入試広報部との統合により、互いに情報を共有し、知恵を出し合いながら高校訪問や進学説明会、入試相談会、オープンキャンパス等に当たる。	
<b>入試広報部の達成目標（P）</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① マーケティング視点を取り入れ、より効果的な学生募集活動を実施する。</li> <li>② 研修やセミナーに積極的に参加し入試広報部職員の資質向上を図る。</li> <li>③ 学内の一体感をつくる。</li> <li>④ 学科定員 260 人に対し、入学者の割合を 100%（完全充足）とする。専攻科(福祉専攻)の入学者数は 35 人以上とする。</li> <li>⑤ 宮崎国際大学との合同企画を実施することで、更に効果的な活動を推進する。</li> </ul>	
<b>入試広報部の行動目標（D）</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 本学の「顧客」「ニーズ」「不安要素」を把握するためのアンケート実施。</li> <li>② 外部で実施される研修会やセミナーに全員が 1 回は参加する。</li> <li>③ 外部講師による全教職員対象のセミナーを開き、総力を挙げて学生募集を行うという気運を高める。</li> <li>④ 高校訪問、進学ガイダンス、出前授業、入試相談会、進路対象説明会、オープンキャンパス、新聞広告等の取組に加え、ホームページ、SNS、交通広告を活用し情報発信に努める。</li> <li>⑤ 短大と大学は緊密な連携を図りながら高校訪問、進学説明会、オープンキャンパスに当たる。</li> </ul>	
<b>入試広報部の評価基準（C）</b>	<b>評価結果</b>
① 短大学科定員 260 人に対し、入学者の割合が 90%に達して [評価 3]	1 2 ③ 4
② 専攻科の入学者が福祉専攻 35 人に達して [評価 3]	1 2 ③ 4
③ 短大のオープンキャンパス参加者が 600 人に達して [評価 3]	1 2 ③ 4
④ ホームページの定期的な更新、並びにタイムリーな更新ができて [評価 3]	1 2 ③ 4
⑤ 全教職員セミナー開催ができて [評価 3]	1 2 ③ 4
⑥ 大学との連携改善が図れて [評価 3]	1 2 ③ 4
<b>入試広報部の評価結果に基づく改善方策の策定(A)</b>	
宮崎県保育士就学支援事業、本学新校舎完成、国を挙げての保育士待遇改善の波、等が追い風となり、今年の保育科は定員充足達成の可能性が濃くなった。また現代ビジネス科においても積極的に学外に打って出る取り組みが功を奏し、定員まであと一歩のところに来ている。また私立大学等経営強化支援事業の補助金を得て、テレビ CM や交通広告、屋外広告などこれまでにない広報媒体を活用できたことも大きいと思われる。効果測定を行いながら今後も時代に沿った広報をすすめたい。また、地域に根ざした短大であることを第一に置き、県内高校との信頼関係維持強化に努めたい。依然として大学・短大淘汰の時代である。多くが全学的な改革を進めている。本学が存続するためにどのような価値をつけねばならないか。今後も全学のみならず、学園全体を巻き込んでの改革に知恵を絞り協力を仰ぎたい。	

<評価結果> 1：全く達成されなかった 2：あまり達成されなかった 3：ある程度達成された 4：かなり達成された

## 6. 事務局

事務局の目的（使命と課題）	
<p>事務局の使命は、法人本部と連携を取りながら、建学の精神「礼節・勤労」の下、本学の教育・研究・学生支援等をそれぞれの業務を通じて推進することである。</p> <p>一般的な事務はもとより、教育・研究・学生支援及び学生募集、さらに大学経営に関する企画・立案と年々職員の業務は幅広く多様化してきた。時代の変化とともに、職員に求められる役割の専門性に対応でき得る資質の向上は不可欠であり、限られた人数での業務遂行には、事務組織内の円滑な連携や効果的な事務運営を図ることが重要となってくる。</p> <p>特に平成 28 年度は昨年度から引き続いての新校舎建設関連工事に加えて、新たに本館耐震補強及び改修工事を行う。授業・研究と同時並行の工事となるため、学生・教職員の安全面を重視しながら、可能な限り授業・研究環境を整えることが大きな課題となる。職員一人ひとりが個々の能力を向上させるとともに、本学を支える一員としての自覚を持ち、教員とともに常に研鑽を積むことに努めたい。</p>	
事務局の達成目標（P）	
<p>①学生・教職員の安全を第一とした上での教育環境の整備</p> <p>②適切な予算編成及び効果的な予算執行</p> <p>③研修の充実（SD 推進委員会）</p> <p>④業務内容の精選・改善・効率化</p> <p>⑤学生募集活動等への積極的参加</p>	
事務局の行動目標（D）	
<p>①工事関係者との連携を密にし、全学（学生・教職員）の安全確保に努める。</p> <p>②学内点検の継続実施と施設設備の維持管理の徹底</p> <p>③予算方針に則った予算編成及び執行</p> <p>④外部資金獲得への取組み</p> <p>⑤SD 活動内容の見直し</p> <p>⑥学外研修会への積極的な参加の推進</p> <p>⑦職域や部署を超え、職員間の協働体制により業務の効率化を図る。</p> <p>⑧オープンキャンパスをはじめ、学外に向けた各種イベントへの参加</p>	
事務局の評価基準（C）	評価結果
①工事関係者との連絡会議が予定通りできて	「3」 1 2 3 ④
②定期的な学内点検・報告ができて	「3」 1 2 ③ 4
③あらゆる項目の支出の見直しができて	「3」 1 2 ③ 4
④外部資金が獲得できて	「3」 1 2 3 ④
⑤FD 推進委員会と連携した研修及び SD 研修内容の見直しができて	「3」 1 2 ③ 4
⑥職員の 3 割以上が研修に参加して	「3」 1 2 ③ 4
⑦職員の半数以上が具体的な業務の改善・効率化ができて	「3」 1 2 ③ 4
⑧各種イベントに職員の半数以上が参加して	「3」 1 2 3 ④
事務局の評価結果に基づく改善方法の策定（D）	



- ① 3年度間に亘った校舎建設及び校舎改修工事期間中に総合定例会議及び定例会議を 40 数回開催した。そのことにより事故なく全ての工事を終了することができ、今年度の最大の成果であった。
- ②職員は毎日施設点検を行い、その際は、一人ひとりが空調・照明・危険箇所等を意識しながら点検している。また、毎月 1 回の本部提出の報告書提出により、危険箇所の把握や修繕等への早期対応ができています。
- ③委託業務契約締結の際契約内容を再度見直すともに、学園全体の委託内容も含めた上での見直しができ経費の節減につながった。
- ④外部資金獲得のために全教職員と情報を共有し、エビデンスの重要性について理解を求めた。平成 28 年度は、私立大学等改革総合支援事業・私立大学等経営強化集中支援事業・私立大学等教育研究活性化設備整備事業及び宮崎市地方創生人材育成支援事業に採択され、宮崎県介護未経験者就学支援事業にも取組んだ。
- ⑤FD 推進委員会と連携した合同研修会も予定通り実施できた。今年は「発達障害に関する課題と私たち自身の個性・特徴をとらえ直す」と題して、新たに学生理解の諸問題についての研修も行った。
- ⑥今年度は、宮崎大学が開催する数種の FD・SD 研修に職員を積極的に参加させることができた。
- ⑦今年度の約半年間は事務室改修により図書館 1 階での業務となったが、それを機会に書類等の整理・処分をすることができたことも改善に繋がった。
- ⑧アンケート結果から、職員の 93%が勤務時間外に本学が開催するイベントに参加している。イベントでは学内とは違った学生の成長した姿を見ることができた。

## 7. 保育科

<b>保育科の目的（使命と課題）</b>	
<p>保育科は、福祉・教育分野に保育者を送り出してきた伝統ある学科であり、今後とも本県の保育・福祉・教育現場の中核を担うべき人材を養成していく役割を持つ学科である。</p> <p>しかしながら、近年の学生の傾向は、「耐性」、「自律力」、「自尊心・自己肯定感」、「精神面」等々に課題を抱えた学生が増加している状況にある。このような学生に対して保育科では、建学の精神「礼節と勤労」、「良識と信頼」（けじめと責任感・信頼感）を基盤とした人間教育を行い、社会が求める保育ニーズに対応できる高い専門性と人間性豊かな人材を養成し、送り出していくことが使命である。</p>	
<b>保育科の達成目標（P）</b>	
<p>① 主体的な学生活動の推進の援助と個別化した学生指導の充実による成長を支援する。</p> <p>② 実習指導の充実を図り、実践力の高い人材の育成を図る。</p> <p>③ 地域や学生のニーズに着目した教育活動を行う。（保育は宮短ブランドの確立）</p> <p>④ 学生募集に全員で取り組む。</p>	
<b>保育科の行動目標（D）</b>	
<p>① 各種の行事において企画段階に参加させ、責任感や主体的、積極的行動を促進する。</p> <p>② 学習意欲を高めるための授業内容(アクティブ・ラーニング等の充実)の向上を図る。</p> <p>③ 個々の学生の実習前・実習中・実習後の状況を把握しつつ、個々に応じた指導の充実を行い、保育者として求められる「責任感」、「協働性」、「礼節」を身につけさせる。</p> <p>④ 学習面や生活面に目を配り、一人ひとりの夢の実現に向けた支援を行う。</p> <p>⑤ 各教員の専門性や得意分野を生かした地域の活動や学生募集活動の充実を目指す。</p>	
<b>保育科の評価基準（C）</b>	<b>評価結果</b>
① 保育フェスティバルやボランティア活動に多くの者が積極的に参加することができたら 「3」	1 2 <b>3</b> 4
② 特に消極的な学生にしっかり心を配り、各学年の退学者を 3.8%以内に抑える。 「4」	1 2 3 <b>4</b>
③ 実習の評価Eを各学年2%に抑え、中途辞退者ゼロをめざす 「3」	1 2 <b>3</b> 4
④ 授業成果の評価に基づき、授業の満足度が4.6以上であれば 「3」	1 2 <b>3</b> 4
⑤ 1人1回は募集活動(ガイダンス)や出前授業に出かける。 「3」	1 2 <b>3</b> 4
	1 2 3 4
<b>保育科の評価結果に基づく改善方策の策定（A）</b>	

## 8. 専攻科（福祉専攻）

<b>専攻科（福祉専攻）の目的（使命と課題）</b>		
専攻科（福祉専攻）は、建学の精神「礼節と勤労」を尊び、品格ある社会人としての教養を深め、多様化する福祉のニーズに対応できる専門的知識と技術、及び人間性豊かな心を備えた介護福祉士を育成する。		
<b>専攻科（福祉専攻）の達成目標（P）</b>		
① 介護福祉士として人間尊重を基本とした福祉意識の高い人材の育成に努める。 ② 退学者0を目標とする。 ③ 就職指導の徹底を図り100%の就職を維持する。 ④ 定員確保を目指す。		
<b>専攻科（福祉専攻）行動目標（D）</b>		
① 専攻科(福祉専攻)職員間で情報の共有を図り、一人ひとりの学生に適切な指導助言を行い、意欲の低下や生活の乱れを早期に発見し、退学につながらないようにする。 ② 実践的な授業をとおして、福祉人材としての高い専門的知識と技術の習得を図る。 ③ 専攻科（福祉専攻）の展望・魅力をしっかりと伝え、介護福祉士資格を持つことの有利さを説明し学生募集につなげる。（国の多機能型施設構想をPRする。） ④ 学生支援部(就職支援課)との連携を図り、綿密な支援を行うことで介護福祉現場の理解をすすめ、即戦力としての福祉人材の養成を図る。 ⑤ 福祉専攻試験の合格者に対しては、専攻科との交流を継続的に行い中途辞退防止に努める。		
<b>専攻科（福祉専攻）評価基準（C）</b>		<b>評価結果</b>
① 退学者を出さず、修了式を全員で迎えることをめざす	「3」	1 2 3 <b>4</b>
② 適切な助言指導を行い、各科目の到達目標を達成できる	「3」	1 2 3 <b>4</b>
③ 修了時まで、専攻科学生全員の希望就職が内定する	「3」	1 2 3 <b>4</b>
④ 卒業時共通試験で全員が6割以上の成績を獲得する。	「3」	1 2 3 <b>4</b>
⑤ 全学的取り組みの中で定員確保が達成できる。	「3」	1 <b>2</b> 3 4
⑥ 専攻科合格者との交流を積極的に行い、中途進学辞退者が0で	「3」	1 <b>2</b> 3 4
<b>専攻科の評価結果に基づく改善方策の策定（A）</b>		
① 適切な助言指導を行うことで、授業への意欲的な姿勢や実習での満足感による自信と成長感を与え、専攻科生としての自信に満ちた成長を促す。 ② 国家試験受験との関連があり、受験の要、不要の混在した状況が続くが、目標をしっかりと押さえさせて国家試験合格の保障を継続して行う。 ③ 定員確保は福祉専攻の生命線であることを踏まえ、本科と連携して継続的に行う。		

## 平成28年度組織のFD宣言（学科）

### 現代ビジネス科

<b>現代ビジネス科の目的（使命と課題）</b>	
<p>現代ビジネス科の使命は、建学の精神「礼節・勤労」に基づき、激動する経済のグローバル化の中で良識と品性を備えて活躍することのできる社会人（ビジネス人）を育てることである。すなわち、して、学科が目指す「人間力」「教養力」「専門力」を兼ね備えた高い実践力とバランス感覚のある人材養成を目指す。</p> <p>志願者減が続いている現状の改善を急ぐことが喫緊の課題であり、教育内容の充実を図るとともに、多様化する学生へのきめ細やかな支援体制を確立しなければならない。</p>	
<b>現代ビジネス科の達成目標（P）</b>	
<p>① 授業内容の充実</p> <p>② 資格・検定取得（基礎級から高次級取得）</p> <p>③ 進路支援の充実（質の高い進路先）</p> <p>④ 実習指導の充実</p> <p>⑤ コースの充実</p>	
<b>現代ビジネス科の行動目標（D）</b>	
<p>① 1年間を通して、キャリア教育の系統性を図りながら、ブロック・ユニット型カリキュラムの推進に向けた体制を作る。</p> <p>② 「アクティブラーニング」を取り入れた授業を行う。</p> <p>③ 進路に直結する資格・検定の特別講座をさらに充実する。</p> <p>④ 企業実習及び医療機関実習実施要項を再度検討する。</p> <p>⑤ 医療機関実習について実習先担当者との連携を深め、訪問指導を盛り込む。</p> <p>⑥ コースの状況や就職状況、在学生・卒業生の声等を発信し、定員の100%以上を確保する。</p>	
<b>現代ビジネス科の評価基準（C）</b>	<b>評価結果</b>
① キャリア教育の系統性を図りながら、ブロック・ユニット型カリキュラムの推進に向けた体制が整ったら「3」	1 2 ③ 4
② 「アクティブラーニング」を取り入れたら「3」	1 2 3 ④
③ 入学後に新たな資格・検定を取得した学生が80%以上になったら「3」	1 2 3 ④
④ 企業実習及び医療機関実習実施要項を再度検討し、実習先の理解を得て指導に加わる態勢ができたなら「3」	1 2 3 ④
⑤ 28年度入学定員が100%以上になったら「3」	1 2 ③ 4
<b>現代ビジネス科の評価結果に基づく改善方策の策定（A）</b>	
<p>①の評価基準については、キャリア教育の系統性は全領域を通してできたがブロック・ユニット型カリキュラムとしての手法としては若干希薄であった。「アクティブラーニング」手法については全員取り入れた。学科の学力については、基礎学力が身につけていない学生が多い。これらは、次年度の課題である。また、キャリア教育をさらに充実することで、進路指導を含んだ人間としての在り方生き方教育を進める必要がある。</p>	

## 平成28年度組織のFD宣言（各部・局・学科）

### （ 自己点検・評価推進委員会 ）

<b>自己点検・評価推進委員会の目的（使命と課題）</b>	
自己評価推進委員会は、本学の活性化（教育研究水準を向上しつつ社会的責任を果たしていく）のために、建学の精神「礼節・勤労」に基づき、教職員の教育研究活動等の状況を自己点検・評価して現状を正しく把握し、その結果を踏まえて優れている点や改善を必要とする点について自己点検・評価を行うことを目的とする。	
<b>自己点検・評価推進委員会の達成目標（P）</b>	
① 「個人の自己点検・評価」が自立的に行われるようにする。 ② 「自己点検・評価相互交流会」を前年度の内容を踏まえて、企画・運営する。 ③ 「自己点検・評価相互交流会」で本学の成果や課題を明確にする。	
<b>自己点検・評価推進委員会の行動目標（D）</b>	
①前年度の反省を活かし「自己点検・評価票」を改善し、全教職員に周知徹底する。 ②従来の「個人の自己点検・評価」及び「組織のFD宣言」を基本とした「自己点検・評価相互交流会」に、前年度グループ協議で課題とされた問題の改善状況の報告を加え、PDCAサイクルの更なる充実を図る。 ③「個人の自己点検・評価」、「組織のFD宣言」、「自己点検・評価相互交流会」で明確になった成果や課題を「自己点検・評価報告書」にまとめ、次年度に向けた取り組みについて、教職員の共通認識を形成する。	
<b>自己点検・評価推進委員会の評価基準（C）</b>	<b>評価結果</b>
① 「自己点検・評価票」様式が改善できて「3」	1 ② 3 4
② 「自己点検・評価票」の中間評価・最終報告を全員が提出して「3」	1 2 ③ 4
③ 「個人の自己点検・評価」及び「組織のFD宣言」を基に、「自己点検・評価相互交流会」を企画・運営できて「3」	1 2 ③ 4
④ 前年度の「自己点検・評価相互交流会」のグループ協議で課題とされた問題の改善状況を報告することができて「3」	1 2 ③ 4
<b>自己点検・評価推進委員会の評価結果に基づく改善方策の策定（A）</b>	
自己点検・評価票の様式については、昨年度の改訂においてほとんどの改善がなされていたため本年度の改訂は行わなかった。来年度については第三者評価も見据えて様式の改訂が必要かどうか検討したい。 自己点検・相互交流会においては、本年度グループ協議における検討課題を明確化し、それぞれのグループで密に協議を行うことができた。 来年度については第三者評価を見据えて、本委員会として取り組むべき事項をおさえ、評価票や相互交流会に反映させていきたい。	

<評価結果>

1：全く達成されなかった 2：あまり達成されなかった 3：ある程度達成された 4：かなり達成された

## 10. FD 推進委員会

<b>FD 推進委員会の目的（使命と課題）</b>	
本委員会は、教員の教育力等の資質を組織的に高め、大学の質の向上を図ることを目的とし、本学内の他組織との連携をとりつつ、各企画を遂行する。	
<b>FD 推進委員会の達成目標（P）</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 低満足層（満足度 40%以下）の学生をなくし、入学満足度 90%以上を達成する。</li> <li>② 学生の能動的・主体的学習の促進</li> <li>③ 学級主任力向上による学生支援の更なる改善</li> <li>④ 研究活動の活性化</li> <li>⑤ SD 推進委員会との連携を深める。</li> <li>⑥ 本学の FD 活動を広く地域社会に広報する。</li> </ul>	
<b>FD 推進委員会の行動目標（D）</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 低満足層の学生を把握し、それに対する対策を講じ、全ての学生に十分な支援・指導が行き渡るようにする。</li> <li>② DP 推進委員会と連携を図り、学生の能動的・主体的学習を促進する。</li> <li>③ 学生支援部と連携を図り、学級主任力向上による学生支援の更なる改善を行う。</li> <li>④ 研究推進委員会と連携を図り、大学における研究活動を活性化させる。</li> <li>⑤ SD 推進委員会と連携を図り、FD・SD 合同ミーティングの実施、FD・SD ニュースの発行を行う。</li> <li>⑥ 入試広報部と連携を図り、本学の FD 活動をホームページ等で広く広報する。</li> </ul>	
<b>FD 推進委員会の評価基準（C）</b>	<b>評価結果</b>
① 卒業時の入学満足度が昨年度よりも上昇して「3」、90%以上で「4」	1 ② 3 4
① 卒業時の入学満足度の低満足層（満足 40%以下）の学生が昨年度よりも減少して「3」	1 ② 3 4
② 1 年終了時・卒業時の全学 DP 調査で示されるリテラシー、実践力のレベルが昨年度よりも上昇していて「3」	1 2 ③ 4
② 学生生活調査で示される「授業以外の勉強時間」が昨年度よりも増加していて「3」	1 ② 3 4
② 年度末に実施される教員の FD 活動に対するアンケートの結果において、全教員がアクティブ・ラーニングを実施できていて「3」	1 ② 3 4
③ 入学満足度調査で示される「教員満足度」が昨年度よりも増加していて「3」	1 ② 3 4
③ 学生生活調査で示される「困りごとや悩みを相談できる教員」が「いる」と答える学生数が昨年度よりも増加していて「3」	1 ② 3 4
④ 教員の研究業績件数が昨年度よりも増加していて「3」	1 2 3 ④
⑤ FD・SD 合同ミーティングが実施でき、かつ FD・SD ニュースが教員・職員共に執筆できて「3」	1 2 3 ④
⑥ 本学ホームページ内において、定期的に FD 活動の紹介ができて「3」	1 2 ③ 4
<b>FD 推進委員会の評価結果に基づく改善方策の策定（A）</b>	
今年度は、学生支援部や DP 推進委員会、研究推進委員会、地域交流研究センター委員会、HP 編集委員会、SD 推進委員会等と連携し、多方面で FD を推進してきた。その取り組みは「全学 DP の結果」や「研究業績の増加」	

という結果からは評価できよう。しかしながら、「授業以外の勉強時間」や「全教員のアクティブ・ラーニングの実施」、「困りごとや悩みを相談できる教員の有無」という点では、十分とはいえない面もある。今年度はイノベーション開始の年として、多方面のFD（広義のFD）を関連する部署と推進してきたが、それらが軌道に乗り始めてきたと考えられる来年度には、FDの中核（狭義のFD）に立ち戻り、また上記評価結果（C）にも基づき、「授業力」、「学級主任力」、「学生募集力」に絞り、FDを推進していきたい。ただし、その際には各部署との連携も重要であるとの認識に基づき（「授業力」→DP推進委員会、「学級主任力」→学生支援部、「学生募集力」→「入試広報部」）、効果的かつ効率的なFD活動を行いたい。

## e - カレッジ推進委員会

### 委員会の目的（使命と課題）

本委員会は、学内LANならびに情報機器の整備・効果的活用などについて企画・運営を行うとともに、教職員や学生の情報活用能力（リテラシー）の向上に資することを目的とする。

### 委員会の達成目標（P）

- ① 学内LAN（サイボウズ、ポータルシステム、共有フォルダなど）の利用促進に必要な整備を行う。
- ② 学内情報機器の整備を行う。
- ③ タブレット端末の運用促進ならびに管理面の充実を図る。
- ④ 情報モラル教育の充実を図る。

### 委員会の行動目標（D）

- ① 学内LANの利用促進に必要な事項を検討する。学生利用フォルダ内を整理し、学生が利用しやすいように整備する。
- ② 学内情報機器の不具合等の有無を確認し対応する。
- ③ タブレット端末の管理・運用に関して検討し、改善する。
- ④ 実習前指導等において情報モラル教育を実施する。

### 委員会の評価基準（C）

委員会の評価基準（C）	評価結果
① 学内LANの利用促進について検討して「3」	1 2 3 <b>4</b>
② ポータルサイトの運用促進を行って「3」	1 2 <b>3</b> 4
③ 学生利用フォルダを整理して「3」	1 2 3 <b>4</b>
④ 不良の情報機器への対応ができて「3」	1 2 <b>3</b> 4
⑤ タブレット端末の管理・運用改善案を作成して「3」	1 <b>2</b> 3 4
⑥ 実習前の情報モラル教育を行うことができて「3」	1 2 3 <b>4</b>

### 委員会の評価結果に基づく改善方策の策定（A）

今年度は、タブレットに関わる項目についての達成度が低かったことから、運用改善方法の一つとして、現代ビジネス科のタブレットの利用等に関する状況を確認し、運用改善案を示していきたい。また、ポータルサイトの利用促進について、教員の利用促進を図っていくことを念頭に置き、ポータルサイトを用いたアンケート調査の方法についてのレクチャー等を行ってしていきたい。

## 研究推進委員会（紀要編集委員会）

研究推進委員会（紀要編集委員会）の目的（使命と課題）	
<p>本学教員の研究活動を推進し、学術研究水準を向上させることを目的とする。 また宮崎学園短期大学紀要の編集・刊行を円滑に行う。</p>	
研究推進委員会（紀要編集委員会）の達成目標（P）	
<p>①本学教員の研究を推進する。 ②研究内容の充実を図る。 ③本学紀要への執筆者を増やす。</p>	
研究推進委員会（紀要編集委員会）の行動目標（D）	
<p>①研究の方法や進め方についての情報発信する。 ②本学教員の研究活動を共有し、共同研究への取り組みを促す。 ③「教育研究」やこれまでの活動内容をまとめ、発展させることを通して紀要への執筆を促す。</p>	
研究推進委員会（紀要編集委員会）の評価基準（C）	評価結果
①研究の方法や進め方について3回情報発信ができて「 3 」	1 2 ③ 4
②本学教員の研究活動について報告し、共有できて「 3 」	1 2 ③ 4
③自己点検・評価票における研究本数が昨年度と同じで「 3 」	1 2 3 ④
④宮崎学園短期大学紀要への執筆者が昨年度と同じで「 3 」	1 2 3 ④
研究推進委員会（紀要編集委員会）の評価結果に基づく改善方策の策定（A）	
<p>目標①については、7・10・1月と3回に渡って情報発信することができた。また目標②についても、昨年度の本学紀要第8号執筆者の研究について報告し、共有することができた。研究推進委員会の活動に関するアンケート（2/1～2/8実施）において、それぞれの活動についての平均値4.2ポイント以上（最大値：5.0ポイント）であったことから活動内容は有効であったといえる。本学紀要のみに焦点を当てた活動ではなかったため、投稿を考える前半のみに活動を集中させず、年間を通した活動を行った。発信する時期と内容については来年度の検討事項ではあるが、回数としては適当であったのではなかろうか。また目標③については、紀要をはじめ本学の研究本数が大きく増加した。その要因として「研究する雰囲気」「共同研究による研究意欲の高まり」が挙げられた。今年度好転した要因を継続しつつ、来年度は科学研究費補助金等の申請に向けての取り組みも加わるので、本学教員の更なる研究活動の促進につながるよう取り組んでいくことが求められる。</p> <p>最後に、アンケート調査から、本学教員の約7割が学会に所属し、学会に所属している者の5割が研究発表等を行っていることが分かった。学会所属がない者の発表等の研究活動が1割であることから、学会の所属、発表等につながる活動も必要ではないだろうか。</p>	

### <評価結果>

1：全く達成されなかった 2：あまり達成されなかった 3：ある程度達成された 4：かなり達成された



## 地域交流研究センター

<b>地域交流研究センターの目的（使命と課題）</b>	
本研究センターは、地域との情報交換及び交流活動を通して、本学の地域貢献を推進・研究することを使命とする。同時に、ボランティア実習Ⅰ・Ⅱの授業を通して学生が主体的に地域と交流することをサポートし、地域に貢献できる人材を育成していくことで本学の発展に寄与することを目的とする。	
<b>地域交流研究センターの達成目標（P）</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 地域の情報収集及び地域との情報交換を行うとともに、地域交流推進委員会を実施し、本学の地域貢献に寄与する。</li> <li>② ボランティア実習Ⅰ・Ⅱの担当者と連携しながら、学生の地域交流をサポートする。</li> <li>③ 「こども音楽教育センター」を円滑に運営する。</li> <li>④ 「保育研修会」を実施し、保育現場のニーズによる学習の場を提供する。</li> </ul>	
<b>地域交流研究センターの行動目標（D）</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 昨年度までの実績を基に地域の各機関との情報交換を行い、地域交流推進委員会の企画、運営を全委員で行う。</li> <li>② ボランティア実習Ⅰ・Ⅱの授業において、学生の地域交流のための具体的な指導、サポートを全委員で行う。</li> <li>③ 「こども音楽教育センター」の運営及び行事等の企画を、委員会でサポートする。</li> <li>④ 「保育研修会」の運営及び行事等の企画を、委員会でサポートする。</li> </ul>	
<b>地域交流研究センターの評価基準（C）</b>	<b>評価結果</b>
① 地域交流推進委員会を実施して「3」	1 2 ③ 4
② 交流を行った地域の各機関にアンケートを行い、交流満足度80%以上で「3」	1 2 ③ 4
③ 本年度のボランティア実習の年間計画を作成し、学生の指導・サポートを行いながら実施して「3」	1 2 ③ 4
④ ボランティア実習授業を受講する学生が各自活動目標を設定し、9割以上が達成できて「3」	1 2 ③ 4
⑤ 「こども音楽教育センター」の運営及び行事等の企画を、委員会でサポートできて「3」	1 2 ③ 4
⑥ 「保育研修会」参加者にアンケートを行い、研修満足度80%以上で「3」	1 2 3 ④
<b>地域交流研究センターの評価結果に基づく改善方策の策定（A）</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 地域交流推進委員会を地域の方々（10名）参加のもとに平成29年1月に実施することができた。ボランティア実習等の学生の発表に出席者より多数嬉しい評価をいただいた。特に本年度より取り組み始めた課題解決班について学生の主体的な行動の育成に関心をもたれた。また、初めて参加された地域の区長さんからも地元の継続的な人材育成に期待を望まれた。</li> <li>② アンケートからは、学生の成長や若い力に期待する声を多数いただいた。昨年の反省を活かし、コーディネーターを置くなどの工夫をしたことで、会議の流れをスムーズに行うことができた。</li> <li>③ ボランティア履修生46名いたので、各班の活動も無理なく行うことができた。機会を増すごとに学生の成長が感じられ、最後の発表は堂々としていた。</li> <li>④ 授業終了後の学生の感想によると、自他の成長を感じている学生がほとんどで目標を達成した。</li> <li>⑤ 「こども音楽教育センター」の発表会はできなかったが、通ってくる地域の子もたちとの音楽療法を始めとする音楽活動は例年通り行い、今年も子どもたちの成長を見ることができた。</li> <li>⑥ 保育研修会は定員（30名）の1.5倍（43名～県内6市2町）の参加者で満足度も92.8%であり、大変充実した研修会であった。</li> </ul>	

## 外部資金獲得検討委員会

<b>委員会の目的（使命と課題）</b>	
本委員会は、本学における外部資金等の獲得及び活用等を推進することを目的とする。	
<b>委員会の達成目標（P）</b>	
① 補助金申請に関する情報を素早くつかみ、獲得できる可能性があるものについては、ワーキンググループ等を設置し申請内容を検討する。	
<b>委員会の行動目標（D）</b>	
① 文部科学省事業「大学教育再生加速プログラム」の採択に向けて申請する。 ② 私立大学等教育研究活性化設備整備事業に申請する。 ③ その他、外部資金獲得が可能な事業への申請をする。	
<b>委員会の評価基準（C）</b>	評価結果
① 「大学教育再生加速プログラム」を申請して「3」	1 2 ③ 4
② 私立大学等教育研究活性化設備整備事業に申請して「3」	1 2 ③ 4
	1 2 3 4
	1 2 3 4
	1 2 3 4
	1 2 3 4
<b>委員会の評価結果に基づく改善方策の策定（A）</b>	
<p>本年度目標としていた大学教育再生加速プログラム（以下、AP）及び活性化設備整備事業への申請をすることができ、また活性化設備整備事業については採択されたことは良かった。</p> <p>来年度は活性化設備整備事業の採択が難しくなることから、文部科学省の補助事業だけでなく、宮崎県や宮崎市の事業において本学が申請できるものがないか検討する必要がある。</p>	